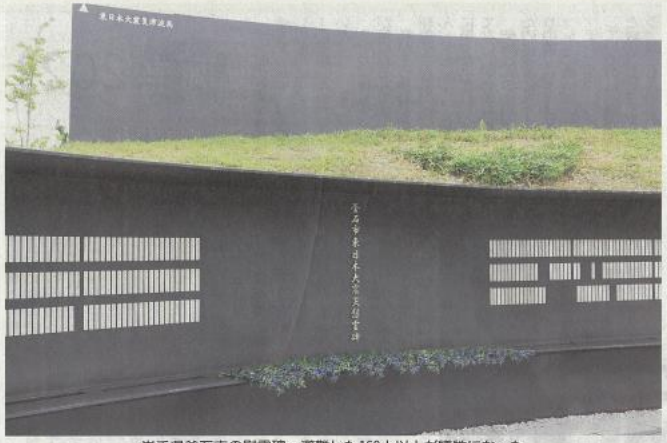
高知新聞防災プロジェクト　いのぐ　土佐弁で「しのぐ」「生き延びる」の意味　▶第3水曜日掲載　高知地震新聞

# 東日本大震災10年　被災地を歩く

# 津波の傷痕　今も鮮明に

## 「教訓を未来へ」語り手願う

東日本大震災から10年が過ぎた8月。全国の教員向けに行われた宮城、岩手両県の被災地視察に、本紙記者が同行した。沿岸に延びる防潮堤。その内側にはかつて街があり、人々の暮らしがあった。被災地は、津波のすさまじさを今も静かに物語っていた。



岩手県釜石市の慰霊碑。避難した160人以上が犠牲になった「防災センター」の跡地に立つ（同市鵜住居町）

震災当時、釜石東中生で校舎から峠まで避難した川崎杏樹さん（釜石市鵜住居町）

視察で訪れた被災地

真夏というのに、気温は20度ほど。記者にとって初の東北は、半袖のみで訪ねたことを後悔するほどの肌寒さだった。雨の下、バスは岩手県釜石市の北部、鵜住居地区へと入る。

「すぐ下に行方不明の人がいるかもしれない。今から行くのはそういう場所です」。視察を主催した一人、宮城教育大学の武田真一特任教授(62)がとつとつと説明した。

### ■誤解と悲劇

鵜住居地区は、複雑に入り組んだ大槌湾に面し、すぐ背後に山々が迫る。

10年前のあの日、ここを高さ約11㍍の津波が襲った。死者・行方不明者580人は、釜石市の犠牲者の半数を超す。

三陸鉄道・鵜住居駅のそばに、黒い石板に犠牲者の名前が刻まれた慰霊碑があった。その後ろに「東日本大震災津波高」を示す、さらに高い石板。津波が一瞬で命をのみ込んでいった。

慰霊碑の立つ場所にはかつて「防災センター」と呼ばれた施設があったという。ただ、そこは津波の緊急避難場所ではなかった。震災当日、この紛らわしい名称の施設に住民190人余りが逃げ込んだ。

津波は建物2階の天井近くまで押し寄せ、160人以上が犠牲になった。実際、センターは地元の訓練で避難場所として使われてきた。名称などが招いた誤解が悲劇につながったと、市はのちに検証している。

### ■皆がいたから

鉄道の線路を挟んだ海側に、2019年のラグビーW杯会場にもなった釜石鵜住居復興スタジアムがある。岸から約700㍍、海抜わずか2㍍。ここに鵜住居小学校と釜石東中学校が立っていた。

震災当日、両校の児童生徒と住民ら600人以上はいったん近くの高台へ。しかしその後迫った津波に危険を感じ、さらに遠くの峠へと逃れた。死者を出さなかったその判断は「釜石の奇跡」とも呼ばれる。

小雨の下、コンクリート舗装の避難ルートをたどった。ガイド役は、駅前にある伝承施設「いのちをつなぐ未来館」のスタッフ、川崎杏樹さん(25)。当時、釜石東中の2年生だった。

体育館でバスケ部の練習中だった川崎さん。避難する際に3㍍の大津波警報を知らせる防災無線が聞こえた。「あれだけ大きな地震。3㍍のはずがない」。友達とそう言い合い、先を急いだ。

地震から30分後。学校から1・1㌔離れた海抜15㍍の高台に着いた。ゴゴゴという地響きとともに津波が家を押し流していた。「死ぬかも」。川崎さんたちはさらに500㍍先の峠に向かった。

「1人だったら、避難できたとは断言できない。皆がいてよかった」と川崎さん。たどってきた坂道を振り返り、自問する。いきなり来る津波に、果たして冷静に判断できるだろうか。

「今はどこで誰といようと、災害が起きたら避難する。周りにも避難を促します」。川崎さんは力を込めた。

### ■伝承こそ復興

仙台市の沿岸部にあった荒浜小学校は、津波の恐ろしさを後世に残す「震災遺構」として保存されている。

4㍍超の津波が4階建て校舎の2階まで襲ったといい、ベランダの壁や鉄柵は今も破損したまま。児童や住民ら320人は屋上などに逃げて無事だった。

沿岸部には今、盛り土でかさ上げされた道が通る。

約12㍍の津波が襲った気仙沼向洋高校旧校舎から海を望む。校庭は昨秋、市営のパークゴルフ場に変わった（宮城県気仙沼市）

震災遺構として保存されている荒浜小学校。破損した校舎が津波の脅威を伝えている（仙台市若林区荒浜新堀端）

児童と教職員計84人が犠牲となった大川小学校。震災遺構として7月公開された。「命や事実に向き合い、未来を考えて」と遺族の一人は語った（宮城県石巻市）

### ■伝承こそ復興

仙台市の沿岸部にあった荒浜小学校は、津波の恐ろしさを後世に残す「震災遺構」として保存されている。

4㍍超の津波が4階建て校舎の2階まで襲ったといい、ベランダの壁や鉄柵は今も破損したまま。児童や住民ら320人は屋上などに逃げて無事だった。

沿岸部には今、盛り土でかさ上げされた道が通る。

再び津波が襲ってきた時は、堤防と合わせ浸水被害を軽減させるという。家々のあった場所は「災害危険区域」として居住が禁止され、一部に観光果樹園もできた。

震災から10年。各被災地には再び道路が付き、施設ができ、人々の行き来はある。一方で空間のだだっ広さと真新しさが目に付き、人々が暮らしていたかつての日常風景は想像しづらい。

「ここは全て人が住んでいたところ。街だったところです」。遺構スタッフの川村敬太さん(39)が、校舎の屋上から「街」を見下ろし、淡々と話した。

3泊4日の視察で川崎さん、川村さんら9人の語り手から話を聞いた。10年の道のりを歩んできた人たちは皆、苦しみや悲しみとともに、この記憶が次世代へ引き継がれることを何より望んだ。

「いつか大地震や大津波が自分を襲うかもしれない、と想像してみて」「同じことを繰り返さないで。そうしたら、この犠牲が無になる」

武田特任教授が視察を締めくくるように言った。「復興とは、壊れた道や建物が元通りになることだけではない」「復興とは過去を総括し、教訓を語れるようになること。伝承が大事なんです」

（馬場　隼）